

日本音楽学会第 67 回全国大会 Session R-3

2016.11.13 中京大学

祝祭としての朗読 - 大栗裕の朗読とマンドリン・オーケストラのための音楽物語のジャンル特性

白石知雄 (西日本支部)

はじめに

M1 大栗裕《ごん狐》より KGMC'74 イブニングコンサート、1974年6月15日

1. 大栗裕 (1918-1982) と音楽物語

1.1. 歌劇と音楽物語

1.2. 大栗裕と関西学院大学マンドリンクラブ (KGMC)

1.3. 慶応大学の服部正 (1908-2008) と関西学院大学の栗裕

1.4. 劇音楽の指導

M2,3 大栗裕《星》練習風景 兵庫県立芸術文化センター、2009年10月25日

2. 音楽物語における朗読と音楽

2.1. 番号オペラと劇伴音楽の間

2.2. フェルマータの効果

M4,5 大栗裕《マーヤの結婚》 KGMC 春期特別コンサート、1961年5月21日

2.3. 放送音楽劇と音楽物語

M6 大栗裕《ごん狐》 朝日放送ラジオ「音楽スコープ」、1962年6月7日

M7 M1 と同じ

3. Melodram としての音楽物語

3.1. "Konzertmelodram"、"Melodram für Kinder" (Schwarz-Danuser 1997) との比較

3.2. 口上と朗読

M8 M6 と同じ

結び

参考文献

大栗裕記念会編、白石知雄作成「大栗裕作品目録」2009年9月16日公開

<http://www.ktpa.jp/ohguri/images/ohguricatalog.pdf>

長木誠司「関西歌劇団の試み」『戦後の音楽 - 芸術音楽のポリティクスとポエティクス』作品社、2010年、272-276頁

金治耕治「特集 大栗裕とマンドリン音楽」『季刊 奏でる! Mandolin』15、2012年、10-11頁

服部正『広場で楽隊を鳴らそう』平凡社、1958年

『京都女子大学マンドリンオーケストラ五十年史』私家版、2013年

網代栄三『オケ伴ゲキ伴 - ある作曲家のくりごと』音楽之友社、1961年

Monika Schwarz-Danuser "Melodram", in: *Die Musik in Geschichte und Gegenwart. Allgemeine Enzyklopädie der Musik* Sachteil Bd. 6, 1997 (2. Auflage), Sp. 67-99

Fabrizio della Seta "Melodrama", in: *Die Musik in Geschichte und Gegenwart. Allgemeine Enzyklopädie der Musik* Sachteil Bd. 6, 1997 (2. Auflage), Sp. 99-114

佐々木健一『せりふの構造』勁草書房、1982年

祝祭としての朗読・大栗裕の朗読とマンドリン・オーケストラのための音楽物語のジャンル特性

白石知雄

はじめに

この発表では、大栗裕（1918-1982）が1961年から1979年に技術顧問として指導していた関西学院大学マンドリンクラブと京都女子大学マンドリンクラブ（現京都女子大学マンドリンオーケストラ）のために作曲した音楽物語の特質の概要を報告します。

まず新美南吉の童話による「ごん狐」という1962年の作品の冒頭をお聴きください。

M1 2'15"

大栗裕の音楽物語は朗読と器楽合奏の交替で進行します。器楽合奏は、しばしば今お聴きいただいた作品のように独唱や合唱を伴います。朗読を受けて音楽がその情景を描き、さらには音楽の側でも、ここでのテンポの急変のように積極的に状況を変化させて、これを次の朗読が受け止めます。生い茂るシダのざわめきといったマンドリンのトレモロを活かした描写が工夫され、調性と旋法を維持する音楽様式の平易さと相まって、物語の進行はスムーズで快適なエンターテインメントになっています。大栗裕は、こうした音楽物語をマンドリンオーケストラのために22作書きました。（本来ならその一覧をお示しすべきところですが、膨大になるので、参考文献に示した作品目録をご参照ください。）

しかし、技術的にも表現力の点でも限界のある大学生のクラブ活動が過不足なく快適なエンターテインメントを実現できてしまうのは、それほど平凡な事態ではなかったのではないか。ここでは、主に朗読と器楽の関係に着目してその要点をスケッチします。

なお、大栗裕は、朗読と器楽合奏を組み合わせた作品を書く際に、「ミュージカル・ファンタジー」「童謡オペレッタ」など様々なジャンル表記を用いていますが、この発表では、現在の日本語の通常の呼称に倣い、すべて一括して「音楽物語」と呼ぶことにします。また、大栗裕の音楽物語は多くの場合「うた」を伴いますが、ここでは、朗読と、独唱・合唱を含めた「音楽全般」との関係のみを論じます。

1. 大栗裕と音楽物語

1.1. 歌劇と音楽物語

大栗裕は大阪に生まれて主に関西の音楽家のために作曲しました。主に吹奏楽の分野で名前が知られていますが、7つの歌劇を書き、ラジオやテレビのドラマの音楽を数多く手がける劇音楽の作曲家でもありました。彼が作曲した最初の音楽物語は、マンドリン音楽ではなく、関西歌劇団創作歌劇公演で初演された、朗読の管弦楽のための音楽「杜子春」です。関西歌劇団の創作歌劇全4公演全体を企画・演出した古典芸能評論家の武智鉄二が、近代小説の朗読とオーケストラの組み合わせをいわば近代版洋楽版の浄瑠璃に見立てた意

欲作です。

しかし関西歌劇団は、武智鉄二による 1955 年から 57 年の 4 公演と翌年の小中学生のためのオペラを制作したのち、1967 年の「飛鳥」まで約 10 年間新作を制作していません。経済的な理由で自主制作が難しかったものと思われます。大栗裕は 1961 年にマンドリンオーケストラのための最初の音楽物語を作曲して、次の年には京都女子大学の教員のためにピアノ伴奏の室内オペラ「悪太郎」を書いています。音楽物語は、室内オペラとともに、本格的なオペラ制作が難しかった 1960 年代前半に、音楽劇の創作意欲を満たすための代案だったかのように見えます。

1.2. 大栗裕と関西学院大学マンドリンクラブ (KGMC)

大栗裕がマンドリンオーケストラと関わるようになった経緯については、関西学院大学マンドリンクラブ（以下、ローマ字の頭文字を取り KGMC と略称します）の OB で帝塚山学園ギター・マンドリンクラブを長年指導している金治耕治が過去の資料から詳細をまとめています。

1957 年に、朝日新聞社の働きかけがきっかけとなり、全関西マンドリンオーケストラ連盟が結成されました。大栗裕は朝日会館での結成記念演奏会の練習指揮者となり、京都の丸山音楽堂の演奏会では本番指揮者を務めます。このときに大栗裕が指揮したのが、服部正の音楽物語「シンデレラ姫」でした。翌年から大栗裕は KGMC の技術顧問に就任しますが、金治耕治は、当時の部員たちが慶応大学マンドリンクラブと作曲家服部正の關係に近い成果を大栗裕に期待していたのだらうと推測しています。

それまでマンドリンと無縁だった大栗裕は、まず研究を兼ねてクラシック名曲の編曲に着手します。これは、部員数が急増して大編成にふさわしいレパートリーを求めていたクラブの事情とも合致したようです。そして技術顧問就任 3 年目に大栗裕が念願の初のオリジナル作品として「マーヤの結婚」を作曲します。服部正の「人魚姫」と同じくアンデルセン童話にもとづく作品です。

1.3. 慶応大学の服部正と関西学院大学の栗裕

服部正は慶応大学マンドリンクラブの OB で生涯このクラブと關係を保ちました。1950 年代後半には、1955 年の「人魚姫」から 56 年の「シンデレラ」、57 年の「かぐや姫」、58 年の「人気姫」再演を挟んで 59 年の「白雪姫」と、慶応大学で相次いで音楽物語を発表しています。服部正の音楽物語は、伊藤京子、栗林義信など二期会で売り出し中の若手歌手が起用され、「かぐや姫」の合唱はダーク・ダックス、「シンデレラ姫」の朗読は黒柳徹子でした。大栗裕は音楽物語に関西歌劇団の若手中堅歌手を招き、朗読を放送局アナウンサーに依頼しますが、これは慶応のやり方を見習ったのでしょうか。東の慶応と西の関学の音楽物語はオペラ歌手と放送關係者が舞台にずらりと並ぶ華やかな催しでした。

1.4. 劇音楽の指導

マンドリンオーケストラの部員たちにとって、ドラマの状況に応じた表現を臨機応変に求められることは、従来のマンドリン音楽にない新鮮な体験だったと思われます。KGMCのOB有志が2009年に大栗裕の音楽物語第3作、ドーデの童話による「星」の冒頭部分をリハーサルしている録音をお聴きください。

M2 1'45"

M3 1'51"

「恐ろしい」のではなく「お腹が減っている」、「かわいらしい星」、「明るい音」など、物語に即した表情の演出に集中した練習になっているのをご確認いただけるかと思います。指揮をしている北尾幸三は、大栗裕が音楽物語を制作しはじめた1960年代前半の部員で、現在も家業の会社経営の傍らで指揮活動を続けています。彼の音楽観は大学時代の体験に根ざしている可能性が高く、大栗裕自身の指導もこれに似たものだったと思われます。

音楽物語は、音楽劇を書きたい作曲家の意向、マンドリンオーケストラへ大規模化への対応、そしてマンドリン音楽として新しさ、三つの要求がかみ合う幸福なジャンルだったと言えそうです。

2. 音楽物語における朗読と音楽

2.1. 番号オペラと劇伴音楽の間

次に音楽物語の楽譜の特徴を検討します。

大栗裕の音楽物語の総譜には、2種類の書式のものがあります。ひとつは番号オペラのようにNo.1から順に番号を振って音楽が区切られているもの、もうひとつは、映画やラジオ、テレビのドラマに挿入される音楽、いわゆる「劇伴音楽」のように、M1、M2とラベリングされた音楽の断片から成り立つものです。

しかし台本の言葉と作曲された器楽の関係は、どちらのタイプの音楽物語においても、オペラや劇伴とは違っています。

一般に、オペラではト書きを含めて、舞台上で起きる出来事と台詞がすべて総譜に記載されます。一方、ドラマに組み込まれる音楽は、通常、作曲家は必要な分量の音楽の断片を納品して、それをドラマにどのように組み込むかという判断は演出家に任されます。劇伴の総譜にはト書きや台本の台詞は記載されず、逆に、進行台本のほうにM1、M2等の音楽の挿入箇所が指定されます。

音楽物語の総譜は、朗読のきっかけを総譜に記載している点が劇伴とは異なります。演出の主導権は指揮者にあり、公演では、ちょうどオペラ指揮者が歌手に指示をだすのと同じやり方で、指揮者が朗読者にキューを出しました。

とはいえ、オペラや20世紀の実験的なSprechgesangのように、話し言葉が「音楽」として制御されるわけではありません。音楽は朗読のタイミングを見計らいながら進み、朗読は音楽の成り行きを見計らいながら進みます。

2.2. フェルマータの効果

具体例を紹介します。

お手元の譜例は音楽物語第1作「マーヤーの結婚」の総譜です。楽譜の上部に、朗読の入りを示す「N」の位置を変更した跡があります。ところが初演の録音は、譜面の「N」ではなく、消された一番左の「N」の位置で朗読がはじまっています。この作品が再演された記録はないので、一度はキューを確定して楽譜に書き留めたのが、その後本番までの間に再び変更されたようです。親指姫が、ひきがえると結婚させられることを嘆く場面です。

M4 1'31"

そして川の魚たちの合唱の後半に約1分間弱の長い朗読が重なります。

M5 0'59"

実演では、最後の言葉「それは野ねずみのお婆さんの家です」が音楽からはみ出しています。しかし言葉だけが残ることで言葉が際立ち、結果的には、むしろ効果的であるようにも思われます。

作曲者は、この2つの箇所を譜例にあるように音楽の切れ目にしばしばフェルマータを設定します。あまりにも単純で、安直とも言えるやり方ではありますが効果は絶大です。

2.3. 放送音楽劇と音楽物語

次にご紹介するのは大栗裕の音楽物語第2作「ごん狐」です。発表の最初に冒頭部をお聞きいただきましたが、この作品は、新美南吉の原作の知名度のせいもあったのかマンドリンオーケストラの範囲を超えて話題になり、初演の直後に朝日放送ラジオで放送され、翌年には関西テレビで放映されました。朝日放送のラジオで放送された30分の音楽番組「音楽スコープ」の録音をお聴きいただきます。最後の譜例の箇所です。

朗読が番組担当の放送局アナウンサーに変わっていますが、それ以外の出演者は初演と同じです。30分の枠に収めるためにいくつかの箇所が省略されています。しかし譜例の箇所の変更は、単なる時間短縮ではなさそうです。「KTV」の文字があり、テレビ収録時の削除が書き込まれていますが、本来は音楽に重ねて朗読することが指定されています。ところがラジオ放送では、朗読の最後に音楽がフェードインする形に編集されています。

M6 0'56"

この録音には、音楽とアナウンサーの語りを別撮りして、あとで貼り合わせた形跡があります。おそらく、アナウンサーの語りが別撮りされた演奏とうまくかみ合わず、このように編集したのでしょう。アナウンサーの名調子を堪能することができて、ラジオ放送とし

ては成功した編集だと思いますが、この放送の 10 年後の再演では、大栗裕は総譜通り、朗読に音楽を重ねる形に戻しています。

M7 0'30"

大栗裕の音楽物語は放送関係者を朗読に器用して、まるで放送を聴くかのように、会場にはスピーカーを通した声を響かせます。しかし、作曲者は、放送局の録音ブースにおける作業とは異なる朗読と音楽の緊密なアンサンブルを望んでいたように思われます。

3. Melodram としての音楽物語

3.1. "Konzertmelodram"、"Melodram für Kinder" (Schwarz-Danuzer 1997) との比較

朗読・話し声と楽器音の組み合わせ、というメディア特性に着目すると、音楽物語は、MGG 第2版に立項されてシュヴァルツ＝ダヌーザーがその概念と歴史を詳述している「メロドラマ Melodram」の一種と考えることができそうです。MGG 第2版は、上演形態としてのメロドラマと、お涙頂戴劇としてのメロドラマ Melodrama を別の項目に分けるなど、メロドラマ／メロドラマという取り扱いが面倒な概念について、画期的に見通しのいい記述を実現しています。しかしそこに大栗裕の音楽物語と合致するケースは見当たらないようです。

器楽を伴う物語の朗読は、ドイツの読書会、文学音楽サークルを母胎とする演奏会用メロドラマ *Konzertmelodram*、すなわちシューマンやリスト、リヒャルト・シュトラウス「イーノック・アーデン」などの作例と似ていますが、大栗裕が採用した台本は口語体の散文であり、演奏会用メロドラマにおけるような韻文の叙事文芸ではありません。また、幅広い聴衆層を楽しませようとする創作意図は、プロコフィエフ「ピーターと狼」などの「子供のためのメロドラマ」と類似しますが、こうしたアウトリーチと原型と呼ぶべきジャンルを特徴づける聴衆への直接的な語りかけ、物語に聴衆を引き入れるための事前の口上が大栗裕の作品には欠けています。

3.2. 口上と朗読

先に紹介した朝日放送「音楽スコープ」における「ごん狐」の冒頭を聴くと、朝日放送のアナウンサー井上美佐子が、前口上と本編の物語をどのように語り分けているか、確認することができます。

M8 1'13"

出演者紹介のあと、一呼吸おいて、やや声色を変えて「昔、あたしが暮らした……」と始める呼吸は、簡潔で的確な話術だと思います。このように、口上を述べる進行役が朗読者を兼ねる場合には、語り手がどこかのタイミングで朗読へと語りのモードを切り替える必要が生じます。そしてここで注意すべきなのは、見事な話術を披露する井上美佐子が、

自らを「解説」とクレジットしていることです。独唱、合唱、マンドリンオーケストラが構成する「作品」に対して、自らは外側からこれにコメントする立場であると宣言、もしくは、謙遜しているかのようです。

一方、関西学院大学や京都女子大学のマンドリン演奏会では、司会進行役を別に立てて、大学の放送部に依頼するのが通例でした。その結果、朗読者は、本日最初にお聞きいただいた録音のように、最初から語り手として言葉を発します。

佐々木健一は『せりふの構造』において、観客に直接語りかける口上を、演劇という祝典の成立基盤であるという意味で「祝典の言葉」と呼んでいます。大栗裕の音楽物語の朗読者は、「音楽」という祝典に外部からコメントするのではなく、むしろ最初から「音楽物語という祝典」の当事者、共演者です。そしてそのような構えが、朗読と音楽の対等な関係でのアンサンブルの基盤になっています。

4. 結び

大栗裕は、朗読と音楽、言葉と音の関係について、単純な手法を用いてはいますが、何か決定的に重要なことを伝えていると、私には思われます。もちろん、まだ多くの検討すべき課題が残ってはいます。アウトリーチ風の「子供向け」でもなければ旧来の韻文によるメロドラマでもない特異な音楽物語が大学生のクラブ活動、しかもマンドリンという大正期に好まれた楽器を扱う場で歓迎された背景には、戦前の童謡童話運動以来の、日本における洋楽と口語文芸の特異な受容実態がありそうですし、朗読と音楽の融通無碍なアンサンブルは、録音編集技術が登場する以前の生放送によるラジオ・ドラマへの作曲者の郷愁があったのではないかとも思われます。しかし、こうした推測を検証するのは今後の課題として、ここでは、大栗裕の音楽物語の概要を紹介したことで満足したいと思います。

慶応大学マンドリンクラブ	関西学院大学マンドリンクラブ	京都女子大学	関西歌劇団
1955年 第75回定期演奏会 服部正卒業25周年記念 (服部正《人魚姫》)			第1回創作歌劇公演 (芝祐久《白虎の湯》、大栗裕《赤い陣羽織》)
1956年 第77回定期演奏会 (服部正《シンデレラ姫》)			第2回創作歌劇公演 (芝祐久《マンドリンを弾く男》、石桁眞禮生《卒塔婆小町》)
1957年 第79回定期演奏会 (服部正《かぐや姫》)	全関西マンドリンオーケストラ連盟結 成		第3回創作歌劇公演(大栗裕《夫婦善哉》) 第4回創作歌劇公演(大栗裕《杜子春》、田中正史《羽》)
1958年 第81回定期演奏会 (服部正《人魚姫》[再演])	大栗裕が技術顧問に就任		小中学生のためのオペラ (近藤圭《さるかに合戦》、大栗裕《雉っ子物語》)
1959年 第82回定期演奏会 (服部正《白雪姫》)			
1960年		学園創立50周年記念祝賀公演 (大栗裕《杜子春》[再演]、歌劇《おに》)	
1961年	春期特別コンサート (大栗裕《マリーヤの結婚》)		
1962年	春期特別コンサート 大栗裕先生を迎えて5周年 (大栗裕《ごん狐》)	女声合唱団中国地方公演 (大栗裕 オペレッタ狂言《悪太郎》)	
1964年	第39回定期演奏会 (大栗裕《星》)	大栗裕が教育学部教授に就任	
1965年			関西歌劇団第19回定期公演 第2回なにわ芸術祭参加 (大栗裕《おに》[再演]、ストラヴィンスキー《エデイス王》)
1966年	大栗裕がマンドリンクラブ技術顧問に就任 マンドリンクラブ第3回定期演奏会 (大栗裕《星》[再演])		
1967年	マンドリンクラブ第3回定期演奏会 (大栗裕《隅田川》)		関西歌劇団第22回定期公演 第4回なにわ芸術祭参加 (大栗裕《飛鳥》)
1968年	マンドリンクラブ第4回定期演奏会 (大栗裕《赤いろうそくと人魚》)		関西歌劇団第25回定期公演 文化庁助成・大阪文化祭参加 (大栗裕《地獄変》)